

古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究 中間報告

小倉慈司

一 研究の概要

本報告書は、二〇一六年度より六年計画にて実施している人間文化研究機構広領域連携型基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」の一ユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の中間報告である。同基幹研究プロジェクトは、「歴史的典籍の「書物」としての面に着目して、従来の書誌学に異分野融合の観点を加え、「総合書物学」という研究分野の構築を目指す」もので、国立歴史民俗博物館（以下、歴博と略称する）、国立国語研究所、国際日本文化研究センター三機関の共同研究を基礎に、国文学研究資料館が主導機関として、常に相互の連携を図り、分野横断的な研究の進展を促すという体制をとる（「異分野融合による「総合書物学」の構築「基本計画」）。これは、国文学研究資料館が展開している「日本語の歴史的典籍の国際共同研究 ネットワーク構築計画」とも連携して進められるものであり、さらに歴博が進める機関拠点型基幹研究プロジェクト「総合資料学の創成」とも密接な関わりを持つ。

本研究が研究対象として選んだ『延喜式』は、延長五年（九二七）に完成し、康保四年（九六七）に施行された、全五〇巻、条文数約

三五〇〇条におよぶ古代の法制書である。古代の法制度は律令格式を基本としているが、『延喜式』はこのうちの「式」にあたる。「式」は律令法の根幹をなす「律令」に対し、施行細則に相当するが、わかりやすく述べれば、諸官司における業務マニュアルと言いうことができるであろう。

三度にわたって編纂された「式」のうち、『延喜式』はその最後に編纂されたものであり、最初の「弘仁式」、二番目の「貞観式」を包摂する内容を有している。その規定の中には、諸国の神社や祭祀、儀礼における調度品や食料、全国からの貢納品など、古代国家を運営するにあたって必要となるさまざまな物品が登場し、さながら「古代の百科全書」ともいえる内容を持つている。それゆえ、古代史のみならず文化史、科学史といった他の研究分野からも注目されるべき資料であるが、「業務マニュアル」であるがゆえに部外者にとってはわかりづらい内容となっているとは言い難い状況にある。

歴博が所蔵する田中稷氏旧蔵典籍古文書には『延喜式』が含まれている（その他、鎌倉時代写の三条西家旧蔵『延喜式』巻五〇も蔵する）が、これは土御門家旧蔵で、江戸時代初期に書写された写本である。近世の書写ではあるものの、全巻揃った善写本として価値が高く、近年

完結した『延喜式』の注釈書である『訳注日本史料 延喜式』（集英社二〇〇〇～二〇一七年）においても底本として使用されたほどである。

そこで本研究では、この写本を主たる研究対象として総合書物学の観点から研究を進めることとした。具体的には、他に蔵される諸写本や版本等の調査を踏まえつつ本文の検討、また『延喜式』の受容史・研究史等にまで及んだ検討をおこない、さらに現代語訳や英訳など、『延喜式』を日本古代史にとどまらない諸分野で活用できるような方法を模索し、その成果を広くネットにおいて発信することを目的とする。

なお、本研究の前段階として、二〇一四年一月より二〇一六年三月まで準備研究「古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究―多分野協働をめざして―」を実施しており、また本研究の開始と同時に科研費基盤研究（B）「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」が開始されている。これらは本研究と深く関わるので、以下、あわせてその概要を説明することにした。

（一）「古代の百科全書『延喜式』の総合書物学研究

―多分野協働をめざして―

国文学研究資料館「日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築計画」プロジェクトの内の人間文化研究機構 機構内協働研究の一つとして二〇一四年一〇月より二〇一六年三月まで実施された。

同研究では、歴博が総合書物学研究を進めるにふさわしい対象史料として『延喜式』を選定し、総合的な研究を進めるための準備を行なった。

（二）「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」

（一）を承け、二〇一六年度より正式にプロジェクトが始動した。本プロジェクトは様々な分野の研究者と協働して現代語訳・英訳を試みるなかで、新たな『延喜式』研究を生み出していくことを目標とする。

達成目標として、大きく分けて以下の二点を掲げることとした。

①分野の枠を越えた協働研究

古代史（文献史学）以外の分野、具体的には分析科学や薬学・食品学・考古学等の諸分野の研究者と協働して『延喜式』の研究を進めることにより、古代の知識と技術の現代的活用など新たな視点に基づいた研究を生み出す。研究にあたっては日本国内のみならずアメリカ等海外の日本史研究者、また古代朝鮮史等の研究者とも連携し、東アジア史の視点を重視して進める。

②垣根の開放

海外も含めた幅広い分野の研究者や一般市民が最新の『延喜式』研究成果を把握できるよう、写本画像・校訂本文にタグ付けをおこなったデータベースや現代語訳・英訳データベース、さらに文献目録データベースを構築して公開する。作成にあたっては海外の研究者と連携して進めることにより、海外の研究者にとっても利用しやすい形を模索する。

（三）「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」

本研究では、予算的制限から（二）で充分に展開することのできない写本・版本研究に力を注ぎ、新たな本文校訂研究を行なう。主な課題は以下の通りである。

①『延喜式』諸写本の写本系統研究

一二世紀以前の書写とされる九条家旧蔵卷子本や金剛寺所蔵本等の古写本の他、歴博所蔵土御門家旧蔵本・京都国立博物館本・国立公文書館所蔵紅葉山文庫本・宮内庁書陵部所蔵藤波家旧蔵本・同部所蔵壬

生家旧蔵本・天理大学附属天理図書館所蔵梵舜本等の近世写本を調査、紙焼写真を蒐集し、写本系統を探る。九条家旧蔵卷子本が祖本である巻一三を除き、近世写本の多くが現在は失われた一条家本に由来するのではないかとの推測がある。土御門家旧蔵本と他の近世写本、部分的に残る一条家本の影写本との異同を詳細に比較検討していくことにより、これを具体的に検証することが課題である。

②『延喜式』写本・版本書入れの調査研究および『延喜式』受容史の研究

写本・版本に書き入れられた校合や按文等を調査することにより、古代以来近世にいたるまでの『延喜式』の受容、校訂史を明らかにする。現状の校訂の中には根拠を持たない版本の文字や書入れを無批判に取り入れている事例も少なくない。単に埋もれていた研究を発掘するというだけでなく、本文校訂のためにも必要な作業であり、①の写本系統研究にも資すると考えられる。一方、書入れは、それがなされた時期や経緯を探ることにより、『延喜式』の理解にとどまらず、そこに記された食材（例えばアワビ）や器物、あるいは事柄等の歴史的变化遷を解明する上での貴重な歴史情報でもある。諸本の書入れを総合的に検討することで、前近代の文化史・技術史といった分野の研究にも結びつけていきたい。

③校訂本文作成

①②の調査結果をもとに、現在の研究水準を踏まえた『延喜式』校訂本文を作成し、その成果を公表する。

本研究がこれまでなされて来なかったことの原因としては、『延喜式』が大部にわたる史料であるため、個人で取り組むことが難しかったこと、奥書のある写本が少なく写本系統を探ることが容易でなかったことなどが挙げられる。

しかし目録学や中近世公家社会における典籍受容史の研究が進展したことにより、『延喜式』の書写関係についてもおおまかな見通しを立てることが可能な段階に達してきた。また諸機関に蔵される写本・版本の所在把握・画像閲覧が以前に比べて容易になりつつあることも指摘しておきたい。とはいえ本文校訂は労力を要する割に地味な研究であり、熱意を持つ複数の研究者が協力して研究を進めることが必要となる。

近世の版本開版、近代の活字本刊行がそれぞれ研究の進展につながったように、今、改めて最新の史料学研究を踏まえた校訂本文を作成することによって、『延喜式』を利用した研究が活発化することが予想される。『延喜式』には科学史や考古学等諸分野に資する様々な内容が収められており、文献史学、また日本古代史のみならず様々な分野における活用にも結びつくことと考えられる。

以上の(一)～(三)の他、研究活動の実施にあたっては、清武雄二代表科研費基盤研究(C)「古代日本の食材加工にみる律令国家税制の実態的研究」(二〇一七～二〇一九年度)とも連携している。

二 研究組織および経費

(一・二) 共同研究「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」

相曽貴志 宮内庁書陵部図書課・首席研究官

本文研究

天野 誠 千葉県立中央博物館・主任上席研究員

(二〇一七年度) 典薬式研究(植物)

荒井秀規 藤沢市生涯学習部郷土歴史課・主査上級(学芸員)

主計式研究(考古)

- 石川智士 東海大学海洋学部・教授(二〇一七年度) 山口えり (二〇一六年度) 本文研究内匠式研究(物品)
水産物研究 広島市立大学国際学部・准教授(二〇一六年度)
稲田奈津子 東京大学史料編纂所・助教 余語琢磨 早稲田大学人間科学学術院・准教授(二〇一六年度)
本文研究 主計式研究(考古)
小川宏和 御食国わかさ小浜食文化館・学芸員(二〇一七年度) Ehan Segal ミシガン州立大学歴史学部・准教授(二〇一六年度)
本文研究内膳大膳式研究(食品) 英訳
小口雅史 法政大学文学部・教授(国際日本学研究所・所長) 小風尚樹 東京大学大学院博士後期課程(研究協力者)
文献目録・データベース(二〇一六年度) TEI
倉本一宏 国際日本文化研究センター・教授 清武雄二 本館研究部・特任助教
文献目録・現代語訳 企画運営・本文研究
小曾戸洋 北里大学東洋医学総合研究所医史学研究所・部長 後藤真 本館研究部・准教授(二〇一五年度)
(二〇一五)一六年度) 典薬式研究(薬物) データベース・TEI
酒井清治 駒澤大学文学部・教授(二〇一六年度) 鈴木卓治 本館研究部・教授(二〇一五年度)
主計式研究(考古) データベース
中村光一 上武大学ビジネス情報学部・教授 仁藤敦史 本館研究部・教授
内匠式研究(物品) 現代語訳
西川明彦 宮内庁正倉院事務所・所長(二〇一六年度) 林部均 本館研究部・教授
内匠式研究(物品) 主計式研究(考古)
早川万年 岐阜大学教育学部・教授 村木二郎 本館研究部・准教授
本文研究 主計式研究(考古)
堀部猛 土浦市立博物館・学芸員 ○三上喜孝 本館研究部・教授
内匠式研究(物品) 典薬式研究(薬物)
町泉寿郎 二松学舎大学文学部・教授(二〇一五年度) ◎小倉慈司 本館研究部・准教授
典薬式研究(薬物) 統轄・本文研究
三舟隆之 東京医療保健大学・教授(二〇一六年度) 三輪仁美 RA(二〇一五)二〇一六年度)
内膳大膳式研究(食品) RA(二〇一六)二〇一七年度)
三輪仁美 宮内庁書陵部編修課・皇室制度調査室員 神戸航介

古田一史 RA (二〇一八年度)

(肩書は二〇一八年八月現在もしくは任期終了時)

(二) 科研費「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」
研究代表者

小倉慈司 研究の統括と推進・写本研究・本文研究(祭祀分野)
研究分担者

清武雄二 統括補助・写本研究・本文研究(技術分野)

稲田奈津子 写本研究・本文研究(儀礼分野)

小曾戸洋 本文研究(医学分野)(二〇一六年度)

酒井清治 本文研究(技術分野)

中村光一 本文研究(技術分野)(二〇一七年度)

仁藤敦史 本文研究(政治・法制分野)(二〇一七年度)

二〇一六年度は連携研究者

早川万年 版本研究・本文研究(祭祀・儀礼分野)

町泉寿郎 版本研究(受容史)・本文研究(医学分野)

(二〇一六年度)

三上喜孝 本文研究(経済分野)(二〇一七年度)

二〇一六年度は連携研究者

(三) 資料整理補助・謝金業務従事(年度は省略)

藍原有理子、井上正望、小川宏和、神戸航介、篠崎尚子、谷口とし、

古田一史、本木洋帆、渡辺美紗子(渡部敦寛、戸村美月)

※括弧内は清武雄二科研費基盤研究(C)「古代日本の食材加工にみる律令国家税制の実態的研究」による雇用

(四) 研究経費

予算 二〇一四年度 二四四万八千円

二〇一五年度 二〇〇万円

二〇一六年度 六〇〇万円

(科研) 四四二万円

二〇一七年度 五四〇万円

(科研) 三六八万円

二〇一八年度 五四〇万円(予定)

(科研) 二七六万円(予定)

この他、二〇一六年度に機構経費にて長夔復元模型を制作し、また歴博経費にてRAの雇用を行なった。

三 研究の経過

(1) 二〇一四年度

第一回研究会 一月三〇日(日) 於歴博

小倉慈司 「研究の発足にあたって―研究の概要と課題」

倉本一宏 「古記録の現代語訳をめぐる」

小倉慈司 「陽明文庫所蔵『勘例 御薬・朝賀・小朝拜』所引弘仁宮内式逸文」

仁宮内式逸文」

第二回研究会 三月一五日(日) 於歴博

今年度の活動と来年度の計画について

荒井秀規 「延喜式の土器と考古学の土器呼称」

榎英一 「運脚について」

清武雄二 「田中本延喜式の翻刻作業―目的・手順と概況」

主な館外調査

三月九日(月)～一二日(木) 於京都国立博物館

京都国立博物館所蔵『延喜式』の調査

その他 東京大学史料編纂所等

二〇一四年度は準備研究として、まず本館所蔵田中穰氏旧蔵典籍古文書の中の土御門家旧蔵『延喜式』のデジタル撮影と京都国立博物館所蔵『延喜式』のデジタル撮影および調査をおこなった。土御門本『延喜式』は江戸時代初期の書写であるが前巻揃った善写本として高い評価を得ている写本であり、本研究の基礎となる資料でもある。また京都国立博物館本は近年、その存在が知られた写本で、これまでの刊本の校訂には用いられていないが、おそらくは土御門本と並ぶ善写本であり、これからの『延喜式』研究上欠かせない写本となると考えられる。何段階かにわたる校合書入れがあり、今後の精査を要するが、他の写本に見られない平安期の本奥書や「弘」「貞」「延」等の標目などが存在し、優れた写本であることが確認された。

研究会は二回開催した。第一回は共同研究の発足にあたり、その経緯と研究計画の概要を研究代表が説明した後、討議をおこなった。また倉本報告では、報告者がこれまでおこなってきた古記録現代語訳における問題点や課題について紹介され、情報の共有を図った。小倉報告では新出史料に基づく「弘仁式」逸文の紹介がおこなわれた。

第二回研究会ではそれまでの研究活動の報告と来年度の計画について報告、議論をおこない、ついで三本の報告がなされた。荒井報告では、土器名称の特定について考古学と文献史学での方法的な違いについて整理が行われ、延喜主計式の土器名称は『弘仁式』の内容を有すること、平城京出土土器との比較がなされるべきことが提言された。加え

て、原本と諸写本との時代的な相違、出土文字資料上の土器名称、和語呼称と漢字の字義、韓国における出土文字の事例等が議論された。榎報告では、中央へ税物を運ぶ運脚規定についての日唐の比較、および延喜民部式上の規定について検討がなされた。唐令については北宋「天聖令」によって条文構成上の分析が試みられ、次いで日本令および延喜式制の運脚規定への展開とその意義について、脚直の負担や具体的な労働力編成のあり方、国司の関与といった点から問題が提起された。清武報告では、田中本延喜式の翻刻における研究上の目的および具体的な手順についての説明と現況の作業報告がなされた。

この他、研究に資するための『延喜式』現行流布テキスト入力作業を開始した。

(2) 二〇一五年度

第三回全体研究会 七月四日 於法政大学市ヶ谷キャンパス

・ 昨年度の活動報告、今年度及び来年度以降の活動について

・ 中村光一 「『延喜式』における語義研究の難しさ―縫殿式一三条、

式内「赤漆」「黒漆」「金漆」の語を中心として―」

・ 堀部猛 「減金・水銀考―内匠式の鍍金規定―」

・ 小曾戸洋 「『延喜式』に至る医薬界の状況」

・ 町泉寿郎 「出雲版『延喜式』と藍川玄慎」

・ 三輪仁美 「紅染深色の禁制とその背景」

第四回全体研究会 三月二一日 於歴博

・ 今年度の活動報告、来年度の活動予定、再来年度以降について

・ 三上喜孝 「古代の医薬文化と医薬官司に関する出土文字資料二題」

・ 清武雄二 「『延喜式覆奏短尺草写』祖本形態の考察―東山御文庫調

査を踏まえて―」

・清武雄二・三輪仁美 『延喜式』の現代語訳・文献目録、データベース化にむけての手順と課題」

主な館外調査

八月二日～二八日 韓国ソウル市調査

国立民俗博物館、国立中央博物館、国立ハンゲル博物館、ソウル大
学校奎章閣韓国学研究所、ソウル薬令市、韓医薬博物館等

一月七日～八日 京都・奈良方面調査

京都御所（東山御文庫本『延喜式覆奏短尺草写』調査）、奈良国立
博物館

一二月三日～五日 伊勢方面調査

せんぐう館、神宮司庁、神宮御料釀調製所、海の博物館、神宮徴古
館等

その他

京都府立総合資料館、東京大学総合博物館、宮内庁書陵部図書寮文
庫、国立公文書館、国会図書館等

当初は二〇一五年度より本格的に研究を開始する予定であったが、その
後、二〇一六年度より人間文化研究機構の基幹研究プロジェクトの
ユニットとして研究を開始する方向で検討することとなったため、
二〇一五年度は主として来年度から研究を開始するための準備作業（組
織作りおよび研究計画の策定）に重点を置くこととした。

取り上げるテーマが多岐にわたることから、当面の課題として本文研
究・現代語訳・データベース・薬品（典薬）研究・土器（主計）研究・
工芸（縫殿内匠）研究・食品（大膳内膳）研究・英訳の分科会を立ち上
げることとし、そのための組織作りをおこなった。また来年度からの研

究に活用するため、既存刊本による本文データの入力を進めた。研究計
画作成のため全体研究会を七月に開催するとともに、また古代日本の医
薬文化に大きな影響を与えた朝鮮半島の医薬文化への理解が不可欠であ
ることから、韓国の医学研究と関連させた研究の可能性を探った。

七月開催の第三回研究会では、これまでの研究成果の確認と今後の方
針・計画等について議論の後、縫殿式・内匠式関連の物品・技法や歴史
学の視点からなどにおける研究の現状と課題についての報告・討論がお
こなわれた。

韓国調査は、東アジア史的視点から『延喜式』記載の制度・物品・加
工法の歴史的系譜を捉えるための一環としておこなったもので、韓医薬
を中心とした史資料および研究状況の把握、韓国学界の情報収集および
韓国研究者との意見交換等を実施した。

一月には東山御文庫御物『延喜式覆奏短尺草写』の拝観が許可され
たことにより、京都御所にて同資料の原本調査を実施した。

三月開催の第四回研究会では、今年度の活動報告と次年度の研究方
針・計画等の説明に加え、薬物および医薬官司に関わる韓国出土文字資
料、東山御文庫調査の成果報告、現代語訳および文献目録の作成、デー
タベース化に向けての作業手順と課題検討がなされた。

なお、今後の基礎データとして研究に活用するために、既存の刊本に
基づく『延喜式』本文データを入力作成し、メンバーに配布した。

以上に加え、来年度における特集展示・歴博フォーラムの開催に向
け、計画を策定した。また二〇一七年度文科省庁舎エントランス展示に
応募し、採択された。

(3) 二〇一六年度

交流協定締結

・四月一日 東京医療保健大学

・七月二六日 法政大学国際日本学研究所
(他に機構が公益財団法人味の素食の文化センターと交流協定締結)

第五回全体研究会 九月一八日 於歴博

- ・小倉慈司 「活動概況と今後の計画について」
- ・山口えり 「海外における『延喜式』研究―英文『延喜式』の翻訳書を中心に―」
- ・天野誠 「延喜式37巻典薬寮に記述されている薬種について」
(紙上報告)
- ・西川明彦 「『延喜式』にみる武器の製作技法」
- ・相曾貴志 「江戸期における延喜式版本の校訂について―勢多家旧蔵本を中心に―」
- ・清武雄二 「国崎・神宮御料鮫調製所見学および熨斗鮫加工実験の報告」

・清武雄二 「『延喜式』現代語訳および文献目録作業」

第六回全体研究会 三月二五日 於歴博

- ・小倉慈司 「活動概況と次年度の計画について」
- ・三舟隆之 「古代堅魚製品の復元―堅魚煎汁を中心に―」
- ・清武雄二 「熨斗鮫加工実験・成分分析報告」
- ・天野誠 「薬種の国内自給体制に関する研究へのアプローチ」
- ・中村光一 「九州大学附属図書館所蔵の『古代染衣法』について」
- ・小風尚樹 「『延喜式』と」E」テキストマークアップの利点」
- ・神戸航介 「『延喜式』現代語訳作業の概況」

展示・フォーラム

・八月二三日～九月一九日 歴博総合展示第二展示室特集展示「『延

喜式』ってなに!」開催

・九月一七日 歴博フォーラム「『延喜式』ってなに!」於歴博
(後援 集英社)

司会 仁藤敦史

趣旨説明 小倉慈司 「『延喜式』とは」

報告1 荒井秀規 「謎の発酵食品、^{くま}豉をめぐって」

報告2 清武雄二 「『延喜式』のアワビと古代の食文化」

報告3 中村光一 「八代將軍徳川吉宗と『延喜式』」

報告4 金在弘 「古代韓国の鉄と農具」 通訳稲田奈津子

主な館外調査

・六月一四日～一六日 鳥羽市国崎町

神宮御料鮫調製所における鮫調製作業・海女漁の調査

・九月二五日 鳥羽市国崎町 熨斗アワビ調製作業の調査

他に東京大学史料編纂所、東京大学総合博物館、前田育徳会尊経閣文庫、皇學館大学附属図書館、京都大学附属図書館、天理大学附属天理図書館、筑波大学附属図書館中央図書館、千葉県立中央博物館、九州大学附属図書館等

その他

内膳大膳(食品)・内匠式(物品) 合同分科会 一〇月二四日

於東京医療保健大学世田谷校舎

・佐藤全敏 「9世紀の天皇御膳の復原をめぐる諸問題」

・清武雄二 「アワビ漁・加工・貢納・饗宴風景および食膳具等の復

元展示にあたって」

本年度が本格的な共同研究の開始年であったが、幸い科研費が採択さ

れたことにより、写本・版本の紙焼写真収集・調査を活発に進めることができ、そのなかで京都大学附属図書館所蔵近衛家旧蔵本の価値に気づいた。残念ながら写本所蔵機関の一つである無窮会専門図書館が耐震工事により休館したため、同館所蔵本については調査・写真収集がかなわなかった。

まず多分野協働研究の基礎となる分科会（内匠式（物品）、TEI、内膳大膳（食品）、主計式（考古））を発足させ、活動を開始した。活動を円滑に進めるため、東京医療保健大学・法政大学国際日本学研究所と交流協定を締結し、また東京医療保健大学・味の素食文化センター・味の素食品文化研究所の協力を得て熨斗アワビ加工実験および分析を進めた。現代語訳の試行も開始した。

次に、準備研究の成果報告とキックオフを兼ね、歴博フォーラムおよび特集展示を開催した。フォーラムは受付開始より二週間ほどで募集を締め切るほど関心を集め、実際にもアンケート回答者の九二%（回収率六〇・三%）より高い評価を得た。特集展示は新聞二紙に展示内容が詳しく紹介され、ネットでも法律関係の話題を取り上げる企業ブログで紹介された。

九月の全体研究会では、六月に実施した三重県鳥羽市国崎町の神宮御料鮫調製所の見学・聞き取り調査の報告のほか、宮内庁書陵部所蔵勢多家旧蔵版本の書入れや英訳に向けた方針についての議論、また『延喜式』に記載された武器の制作技法を研究する上での正倉院宝物、また近世の兵庫式解説書である『延喜式工事解』の価値について報告がなされた。さらに現代語訳の現状と方針についての議論も行なった。推進評議会委員からは、中近世における『延喜式』研究を把握することの重要性について指摘があった。

三月の全体研究会では、今年度を実施した熨斗鮫加工実験・成分分析の結果報告、『延喜式』に見える「堅魚煎汁」、典薬式にみえる薬種に

ついて植物学からの検討、近世の古代染織についての研究書である『古代染衣法』の研究、TEIを用いた延喜式テキストデータの利用方法、現代語訳作業の進行状況報告などがなされた。薬種については韓国木簡記載の薬種との関連性や『東医宝鑑』等の韓国医学史料の重要性が喚起され、推進評議会委員からは江戸時代の薬草研究の事例が紹介された

その他、延喜式研究文献目録の作成を開始し、東京医療保健大学学生の卒業研究への協力や集英社『訳注日本史料』編集事業への協力も実施した。なお、RAとして雇用していた大学院生が就職したことにより、共同研究の正規メンバーに追加した。

（4）二〇一七年度

全体研究会

第七回全体研究会 八月一日 於歴博

・小倉慈司 「活動の概況と予定」（含本文校訂方針検討）

・大隅亜希子 「『延喜式』と正倉院文書における織物の単位について」

計量制度の変遷とのかかわりから」

・石川智士 「『延喜式』の記載と水産物の価値」

・意見交換 「来年度における中間成果のとりまとめについて」

・神戸航介 「『延喜式』現代語訳作業の概況報告」

第八回全体研究会 二月二十八日～三月一日 於宮内庁正倉院事務所、奈良文化財研究所等

・小倉慈司 「今年度の活動概況および来年度の予定」

・酒井清治 「考古学からみた土器（須恵器）」

・井上正望 「論文目録作成の進捗状況について」

・神戸航介 「『延喜式』現代語訳作業の概況報告」

・堀部 猛 「古代の鍍金と内匠寮―金・水銀の分量比をめぐって」

・奈良文化財研究所見学
・橿原考古学研究所附属博物館見学

主な館外調査

・熨斗アワビ現地調査 五月二八日 於神宮御料鮫調整所(鳥羽市)
・金属加飾法調査 一二月四日 於森本鋳金具製作所(京都市)

その他

前田育徳会尊経閣文庫、宮内庁書陵部図書寮文庫、京都大学附属図書館、國學院大学図書館、天理大学附属天理図書館、京都大学日本史研究室、静嘉堂文庫、東京国立博物館、国文学研究資料館、東京大学史料編纂所等

展示

・文部科学省エントランス企画展示「古代の百科全書『延喜式』」に学ぶ、いにしへの暮らし」、四月二七日～六月二七日 於文部科学省エントランスホール(人間文化研究機構と共催)
※五月二六日に文部科学省「情報ひろばラウンジ」講演会「『延喜式』から読み解く古代の社会と文化」実施於文部科学省情報ひろばラウンジ
・仁藤敦史 「『延喜式』からみた陵墓の体系 陵墓と前方後円墳」
・清武雄二 「古代の長鯨を復元する『延喜式』」記載の貢納品研究」

今年度はまず食品(内膳大膳式)関連の研究を水産学や広く地域社会の視点から展開していくことを目的として、新たに水産学の研究者をメンバーに追加し、また全体研究会に毎回参加していた大学院生で、食文化関連の学芸員として職を得た若手研究者を共同研究のメンバーに追加した。なお、館内メンバーが科研基盤研究(C)「古代日本の食材加工

にみる律令国家税制の実態的研究」を、また館外メンバーが科研基盤研究(B)「古代食の総合的復元による食生活と疾病の関係解明」を獲得したので、両研究とも協力しつつ研究を進めることとした。

写本・版本研究については、主だった写本・版本の収集をほぼ終え、写本系統の検討に本格的に取り組み、一部についてのみではあるが、近世写本の書写系統図を描き、写本系統研究の道筋を立てることができた。なお、休館のため調査不可能となっている無窮会専門図書館所蔵本については故虎尾俊哉氏収集紙焼写真帳の提供を受け、写真帳での調査を実施することができた。また公益財団法人味の素食の文化センター・味の素株式会社食品研究所の協力を得て、昨年度に引き続き、熨斗アワビ加工実権およびその成分分析を実施した。昨年度はメガイアワビを用いたが、今年度はマダカアワビを使用した。

分科会は、昨年度に引き続き、工芸品(内匠式)、土器(主計式)、食品(内膳大膳式)、薬物(典薬式)、TEIについての活動を進めた。このうちTEIについては、「TEI 2017 VICTRIA」(11月11日～15日)にて、メンバーが発表した『延喜式』の単位表記に関するTEI拡張スキーマの考察が、TEIコンソーシアムの幅広い関心を喚起し、単位表記のためのTEIタグセットがガイドラインに採用されることとなるなど、日本語史料の扱いに関して国際的に取り組むためのきっかけを提供する重要な貢献となった。また新たな多分野協働研究のテーマとして鍍金を着目し、アマルガム鍍金を行なっている森本鋳金具製作所の聞き取り調査を実施した。

現代語訳については検討会を月一回程度の頻度で開催し、論文目録データベースは謝金によってデータ整備を進めた。英訳も本格始動にむけた予備研究として、現代語訳に合わせるかたちで検討会を開催した。ユニット間の連携として、国立国語研究所・国文学研究資料館・国際日本文化研究センターとTEIに関するマークアップについての検討会を行

った。

全体研究会は二回開催した。第七回全体研究会では本文検討の上でも問題となった布の単位について、ゲストを招いて検討を行なった。報告者によれば、正倉院文書など奈良時代の史料では、調布の単位「端」と庸布の単位「段」が明確に区別されているのに対し、延喜式では書き分けが不統一で、一〇世紀以降両者が表記上区別されなくなるといふ。また『延喜式』の地方貢納品リストにみえる水産物について、水産学の立場からの提言や問題点等について報告をいただいた。さらに今年度の活動予定や現代語訳作業の問題点等についても報告、議論を実施した。

第八回全体研究会では『延喜式』にみえる土器名称の検討、問題点について検討を行ない、また一二月に実施した金属加飾法調査を踏まえ、『延喜式』の鍍金関係条文の新たな読解試案の提示がなされた。第一回に引き続き、現代語訳作業の経過報告を実施し、『延喜式』関係論文目録作成作業や来年度の研究計画についても報告および話し合いを行なった。その後、奈良文化財研究所にて山崎健氏および小田裕樹氏の御案内のもと藤原宮・平城宮出土の動物考古資料や土器資料を熟覧し、資料について様々な分野から意見交換を行なった。

人間文化研究機構と共催で、文部科学省エントランス企画展示「古代の百科全書『延喜式』」に学ぶ、いにしへの暮らし」を四月二十七日から六月二十七日にかけて文部科学省エントランスホールにて実施した。会期中、五月二十六日には文科省情報ひろばラウンジにて講演会「『延喜式』から読み解く古代の社会と文化」を開催した。この展示のために昨年度、長鯨復元模型を制作したが、その画像を二〇一八年三月に開館した平城宮跡歴史公園「平城宮いざない館」の情報検索コンテンツ「現れた平城宮の姿」に画像提供した。

以上の他、メンバーが執筆に加わった『延喜式』巻二八〜五〇に関する注釈書が刊行され、また三月六日より開催（二〇一八年五月六日ま

で）の歴博企画展示「世界の眼でみる古墳文化」にてメンバーが延喜諸陵式関係展示を担当した。昨年度に引き続き、東京医療保健大学医療保健学部医療栄養学科三舟隆之卒研ゼミにおける研究（『延喜式』に見える鼓の製法実験）「『延喜式』に見える「酢」の製法実験」の研究計画策定支援、成分分析支援を実施した。

なお、本共同研究は機構基幹研究プロジェクトのグッドプラクティスに選ばれ、一月七日機構総合人間文化研究推進センター会議にて清武雄二が発表を行なった。

(5) 二〇一八年度（九月まで）

第九回全体研究会（研究集会） 八月三十一日〜九月一日 於歴博

- ・小倉慈司 「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の活動
- ・永島朋子 「古代の儀式に見る植物の表象性―挿頭花（カザシ）中心に―」

- ・清武雄二 「『延喜式』現代語訳作成の現況と活動予定―内匠式の事例紹介―」

- ・古田一史 「『延喜式』巻一七「内匠寮」現代語訳（稿）補考の事例紹介
- ・後藤 真 「『延喜式』データベースについての報告」

- 「特集1 英語圏における日本史史料の翻訳と『延喜式』」
- ・河合佐知子 「女性・ジェンダー史から考える前近代史料用語翻訳の重要性とその課題」

- ・山口えり 「『延喜式』の英訳に関する現状と課題」

- 「特集2 『延喜式』と水産資源」
- ・清武雄二 「古代における貢納水産品の産地形成」
- ・武藤文人 「古典籍の鮪と推定漁法」

- ・花森功仁子 「延喜式や木簡に記載されている各地の水産物の考察を踏まえた今後の展開」

主な館外調査

国立公文書館、宮内庁書陵部図書寮文庫、東洋文庫、国会図書館、
愛知県陶磁美術館、東京大学史料編纂所等

本年度は年度末に延喜式研究文献目録データベースを公開することを
目指して、システム構築、データ整理を進めている。データベースでは
『延喜式研究』掲載論考のPDF公開を目指しており、執筆者の許諾を
得る手続きを進めた。またプロジェクト開始三年目にあたるため、中間
報告として来年度の『国立歴史民俗博物館研究報告』特集号刊行を目指
している。

全体研究会は八月三十一日・九月一日の二日間にわたり、研究会とし
て一〇名による報告を行なった。

初日はこれまでの研究の歩みと今後の研究計画について紹介を行なっ
た後、古代の官人が頭に花飾りを装着する挿頭花に着目した研究や、現
代語訳の進捗状況・課題報告、また来年度以降、作成を進める延喜式デ
ータベース構築の方向性について検討がなされた。

二日目は「英語圏における日本史料の翻訳と『延喜式』」「『延喜式』
と水産資源」という二つの特集を組んで報告を行なった。英訳は本研究
が掲げる柱の一つであるが、進めるにあたっては多くの課題があり、今
後の方向性も含めて検討がなされた。

二つ目の特集は現段階である程度研究が進んでいる水産品研究を土台
としてどのような形の多分野協働研究が可能となるかを探ったものでは
ある。報告は文献史学一名、水産学研究二名からなり、さらに民俗学から
のコメントも加わった。課題となるのは、古代と現代という時間的懸隔
をどのように埋めるかということであるが、一見、その分野では通説
として捉えられていることであっても、違う分野から眺めることによっ
て別の考え方が可能であることも示され、多分野協働研究の重要性が改

めて認識された。

四 今後の課題

二〇一八年度はデータベース構築が全体の予算の中で大きな比重を占
めることになり、主として中間成果のとりまとめに重点を置くこととな
った。当初計画として今年度までにほぼ達成できたものとしては、主要
写本・版本の写真収集が挙げられる。それによってごく一部ではあるも
のの写本系統を描き出すことが可能となった。今後の課題として、まず
は本文校訂作業および現代語訳を進めていくことが挙げられる。水産品
分野については、ぜひ実りのある多分野協働研究を具体化させていき
たい。英訳については、マンパワーが限られているなかで、当初計画して
いた条文の逐語訳に限定せず、『延喜式』の概要、あるいは各条文の概
要の英訳など、海外研究者にとって実際に役に立つものを提供してい
くこと、また研究者の育成といったことも結びつけていくことが求めら
れる。

研究を進めてきたなかで見えてきたこととしては、朝鮮半島の影響を
検討する必要性である。古代日本文化に朝鮮半島文化が大きな影響を与
えてきたことは言うまでもないが、『延喜式』は朝鮮半島の影響が薄れ
てきた一〇世紀の成立であり、これまでは中国との比較はなされること
はあっても、朝鮮半島が俎上にのぼることはほとんどなかった。しかし
生活に密着したものであればあるほど、古い時期に受けた朝鮮半島の影
響が後世にまで残存している可能性は高い。残念なことに現存する古代
朝鮮の史料は限られているが、近年増加している出土文字資料の他、高
麗以降の史料にも視野を広げることによって、新たに見出せるものがあ
るのではないかと考えている。

またデータベースについてはここ数年の技術の進歩が急速であり、使

い勝手も含め、どのような形が良いのか、検討を重ねている。費用的な問題もあるが、できるだけ早く方向性を定め、二〇一九年度には具体的なシステム検討に入るようにしたい。

残り三年間でできることは限られているが、可能な限り、これまでの研究の蓄積をさらに発展させつつ、まとまった成果が発信できるよう努力していきたい。

付記

本報告は、人間文化研究機構広領域基幹研究プロジェクト「異分野融合による総合書物学の構築」のユニット「古代の百科全書『延喜式』の多分野協働研究」の中間報告であるとともに、JSPS科研費基盤研究(B)16H03485「史料学的検討を重視した『延喜式』の基礎的研究」、また国立歴史民俗博物館「総合資料学の創成」の成果でもある。

(国立歴史民俗博物館研究部)